

## 【社会学系コンソーシアム 2023年度公開シンポジウム 予稿集】 「なぜ、社会的孤立は問題なのか？」

**主催：**社会学系コンソーシアム・日本学術会議社会学委員会

**共催：**国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター

**日時：**令和6年(2024年)3月9日(土)13:00~16:30

**場所：**オンライン開催

一般参加可能、参加費無料です。以下の URL にアクセスして必要事項を入力ください。**先着 1,000 名**まで参加可能です。

参加申し込みフォーム：<https://forms.gle/sQ5MrXzwKNsmPTpj8>

### 開催趣旨：

近年、社会的孤立の問題に強い関心が集められている。この問題に関しては、日本学術会議、内閣府、JST,RISTEX などこれまで様々な議論がなされてきたが、本シンポジウムではそれらの成果も踏まえたうえで、社会学、社会福祉学の視角から「単に個人の孤立や困難が問題なのではなく、社会構造や組織・制度によって作られていく社会的孤立が問題である」という立場に立ちつつ、社会的孤立はなぜ問題なのか、を改めて問い直す。

例えば、福祉制度の枠から外れてしまった「新たな社会的貧困層」の中では、DV、虐待などに苦しんでいるシングルマザー、あるいは他の支援を受けられないヤングケアラー、既存の集団には属していない外国人などにおいて社会的孤立が生じている。

また、つながりを作りさえすれば孤立が解消するわけでもなく、若者の SNS 上で見られるような表面的な友人数の増加は、真の意味での友人や支援者の形成につながっていない可能性がある。さらに、今日の社会状況の下では家族の絆によって孤立を防ぐことにも限界がある。本シンポジウムでは、家族、地域、教育、福祉など、以前より個別社会学が対象としてきた領域のみならず、年齢、ジェンダー・セクシュアリティ、階層など多様な視点から社会的孤立を問題にする。このために、社会関係の複雑な重なり合いやソーシャルキャピタル(社会関係資本)を含めた多様な領域から登壇者を迎えて、この問題を検討していきたい。

また、日本科学技術振興機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)が令和3年度から進めてきた「社会的孤立の予防」プロジェクトの浦光博総括にも、趣旨説明の中でご登場いただいて、このプロジェクトと本シンポジウムとの関連を述べていただく予定である。

**次第：**

司会 **有末 賢**（亜細亜大学都市創造学部教授）

挨拶

13:00 開会の挨拶

**浅川 達人**（日本学術会議連携会員、早稲田大学人間科学学術院教授）

13:05 趣旨説明

**有末 賢**（亜細亜大学都市創造学部教授）

報告

13:20 「なぜ社会的孤立が問題なのか？」

**石田 光規**（早稲田大学文学学術院教授）

13:50 「高齢者の社会的孤立の問題の所在と課題—社会福祉学の立場から」

**斉藤 雅茂**（日本福祉大学社会福祉学部教授）

14:20 「家族、貧困、孤立のスパイラル」

**阿部 彩**（日本学術会議第一部会員、東京都立大学人文社会学部教授）

休憩

14:50

討論

15:00 **稲葉 陽二**（元日本大学法学部教授）

**野沢 慎司**（明治学院大学社会学部教授）

15:30 総合討論

総合討論司会：**有末 賢**（亜細亜大学都市創造学部教授）

挨拶

16:25 閉会の挨拶

**関 礼子**（立教大学社会学部教授）

**岩井 紀子**（日本学術会議第一部会員、大阪商業大学総合経営学部教授）

## 報告要旨

### 【第1 報告】 「なぜ社会的孤立が問題なのか？」

石田 光規（早稲田大学文学学術院教授）

#### 【要旨】

近年、社会的孤立が問題視されるようになった。その一方で、孤立を「問題」として取り上げると、「孤立の何がいけないのか」という反論が寄せられる。本報告では社会的孤立の問題の所在について簡単にまとめ、社会的孤立を「問題」として扱うことの難しさを論じる。

具体的には、現代社会のつながりの状況をおさえた後で、孤立・一人という現象に潜む対象の扱いがたさ、支援というまなざしで孤立者に接してゆくことの問題、孤立者の「居場所」をつくっていくさいの課題、人間関係の根本に潜む問題について取り上げる。

これらの問題の検討をつうじて、なぜ、現代社会において社会的孤立をとりあげるべきなのか、取り上げるに当たってはどのような問題が発生するのか、という点について考察・検討する。

### 【第2 報告】 「高齢者の社会的孤立の問題の所在と課題—社会福祉学の立場から」

斉藤 雅茂（日本福祉大学社会福祉学部教授）

#### 【要旨】

コロナ禍を経て、政府は2021年に孤独・孤立対策担当室を設置するなど、社会的孤立は大きな関心事の一つになっている。社会的孤立とは、家族やコミュニティとほとんど接触がない状態であり、情報や資源の不足、緊急時および平時のソーシャル・サポートの乏しさ、自己効力感の低下を経由して、自殺のトリガーや健康余命喪失にもつながることが知られている。かつては「老いと孤立」という通説があったが、その後、高齢者全体が社会的に孤立しているわけではないことは国内外で一致している。そのうえで、介入・支援対象としての社会的孤立には、社会的排除ともいえるような深刻な状態像から他者との交流がやや乏しい状態までがありうる。社会福祉・地域福祉施策における支援対象としては極端な孤立状態に目を向けがちだが、後者であっても無視できない状態であることが既に知られている。現行の社会的孤立軽減にむけた様々な取り組みのプロセス評価や効果評価の蓄積と精緻化、ポピュレーション戦略の可能性とモニタリングが今後の課題と考えられる。

**【第3報告】 「家族、貧困、孤立のスパイラル」**

**阿部 彩（日本学術会議第一部会員、東京都立大学人文社会学部教授）**

**【要旨】**

「孤立」と「貧困」は、近接する問題である。貧困者は、非貧困者に比べて、他者との交流が少なく、孤立に陥りやすいことは多くのデータにて確認できる。両者に関連する共通の背景が家族の希薄性である。孤立のリスクが高い属性として、単身の高齢者や、ひとり親世帯の親などが注目されることが多いが、報告者の分析からは結婚していても子どもがいない人々も孤立に陥りやすいことが確認された。欧米においては、子どもがいない人々は、子どもがいる人々より活発的な社会生活を送っているという報告もあり、日本の状況は決して「当たり前」ではない。日本においては典型的なライフコースからの逸脱と「貧困」および「孤立」の関連がある。この関連性の背後には、家族主義や自己責任論が存在しており、家族を越えたコミュニティや連帯に基づく国家作りを阻んでいる。

## 討論要旨

**【第1討論】 稲葉 陽二（元日本大学法学部教授）**

**【要旨】**

孤立は高齢者、男性、単身、の問題から、女性も含めた若年層の問題へと変化しているようにみえます。もし、そうだとすれば社会的孤立を社会全体の問題として捉える為には幼少期・青少年期での対応が優先課題のように思えます。こうした視点から、孤立がなぜ問題なのか、孤立の若年化と「ひきこもり」、孤独も含めた因果関係に関する理論的枠組み、孤立の緩和手段としてのICT・SNS・AIの活用等について議論したいと思います。

**【第2討論】 野沢 慎司（明治学院大学社会学部教授）**

**【要旨】**

社会構造・制度が個人の孤立や困難が生み出す側面に光をあてる本シンポジウムの意義は大きい。例えば、シングルマザーの孤立や困難は比較的に見えやすい社会問題だが、日本独自の離婚・再婚制度がそれを促進する側面は不可視化され、議論されない。「ひとり親家族パラダイム」とでも言うべき現状の社会制度・規範が、離婚・再婚後家族の子どもに家族内での孤立と困難を強いている側面にも光が当たらない。ここに未開拓の研究課題が隠されている。